
ナットクラッカー

将

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナットクラッカー

【Nコード】

N7969E

【作者名】

将

【あらすじ】

中谷は、彼女から別れを告げられ、一時間前のことを思い返す。高田は、友との約束を果たすため、友達と遊園地へ遊びに行く。明村は、ホットココアを飲みながら親の帰りを待っていると、カップルのケンかを目撃する。そして、それぞれが大きな事件に巻き込まれていく。

Opening

カップルたちは、遊園地で遊び、ある事件に巻き込まれていく。

殺人犯は、子供を誘拐し遊園地に行く。

刑事は、殺人犯を追って、遊園地にたどり着く。

scene 1

オカタクニ
中谷

「別れよつか。あたし達」『恋人たちが愛を深め合う』日に、別れを告げられるとは思ってもいなかった。

まず、思ったことは、このごろ話題の『男度』を計測しているんじゃないかということだった。そういうことだと、今までのことも、全てつながる。

「何で？ 確かにケンカは多かったかもしれないけど、まだ、俺らやってけるって！」と、言えば、そうよね。と、返してくれると信じていたが、「そういうことは、一回、けりをつければわかるし……」とあっさり返されてしまった。

遊園地に入ったときからそんな感じだったのか、一時間前のことを思い返す。

灰色の空が上にあり、遊園地日和ではないな、と改めて思う。入場券を買うために、並んでいるけれども、やはり退屈だ。

「クリスマスだから、やっぱり、混んでるね」風香は、少しむすつとした声を出す。

「もう少し早く来るべきだったね」

気づけば、次の番が俺らだった。受付から、次の方どうぞ、と声が聞こえる。

「大人二枚で」と言い、二人分のお金を出す。すると、「あたしも出す」と、風香は言い、財布から一人分のお金を出し、俺に渡す。

「いや、いいって」お金を風香に返す。こういうのは、男が払わなければいけないという、『定義』が俺にはあった。

「もらって。いいから」だが、彼女は強引に渡してくる。それを見ていた受付の人は、「あの、次のお客さんがお待ちになっておりま

すので……」と遠慮がちに言う。
「すいません」と俺らは謝って、その場を立ち去る。

園内はクリスマスということもあって、客の大半がカップルや家族連れで占めている。目の前には、この遊園地のシンボルともなっている、天使のような大きい人形がそびえたっていて、家族連れやカップルが人形の前で写真を撮っている。

「お腹空かない？」風香は、俺の顔を覗き込んでくる。クリツとした目が、大きくなる。

「少し減ってきたね。そういえば」と言い時計を見る。十一時三十分だ。これだけ、人が混み合っていれば、十二時頃には長蛇の列に並ばなければならない。俺らは、『並ぶ』と言うことにはめっぽう苦手なので、風香の手を握り、「じゃ、買いに行こうか」と言って走り出す。

いきなり、肩をつかまれる。後ろを振り返ると、サングラスをかけた、柄の悪い男がいた。黒いロングコートを着ている、こんな『やくざ』みたいな人が何のようなんだろうか。

「てめえ、当たったんだけど」親指で後ろの方を刺している。肩に当たったみたいだ。

「あ、すいませんでした」といいお辞儀をする。また逃げてしまった、と後悔する。俺は、ピンチが訪れると逃げ出す傾向がある。

「何言ってるのよ。私、肩になんかぶつかってないわよ。それに、誰ともぶつかってないし」ぶすつとして声で言う。男が舌打ちをする。

「しらばっくれてんじゃねえよ。どういことだよ。それ」『やくざ』の舌打ちは、動揺を紛らわすためにも見えた。「おい。ぶつかってるの、見たよな？」『やくざ』は、後ろに喋りかけている。何を一人でやっているのか、と思うと後ろから人が出てきた。女だ。背は俺よりも低くて、ちょうど風香くらいだ。ロングヘアーで、目

がパツチリとしている。赤色のロングスカートがよく似合っている。『綺麗』というよりは、『可愛い』の部類に入る。彼女だろうかと思つたがそれにしては歳が離れすぎている。兄弟にしては、不釣合いだ。

「よ、よくわかりません……」彼女は、泣きながら小さい声でそう言つた。

すいませんでした、と言ひ、風香を無理やり連れて走り出す。「なんでよ、あっちが嘘ついてるのに」と、風香の不平不満が聞こえる。一つ、気づいたことがあつた。なんで、彼女は泣いていたんだ？

高田
タカダ

「じゃあな」頭の中で、紅羽アカハネの声が聞こえた。はつとして、後ろを振り向く。でも、そこに紅羽はいなかつた。そのかわり、チケット売り場の女性と、一組のカップルがもめているのが目に入る。お金をどちらが払うかでもめているようだった。心底、くだらない、と思う。ふと、三ヶ月前の事故が断片的に脳裏に浮かぶ。

住宅街の中を、俺ら三人は、喋りながら歩いている。そのとき、映像がカラーだったものが、白黒に変わる。そして、ビデオで見ていた映像を、スロー再生にしたかのように、映像が遅くなる。紅羽が、トラックが来ているのを見つける。目の前は、工事中で逃げられない。でも、逃げなきゃ、当たる……。

「早く行くよ！」前田マエダの声で、現実引き戻される。彼女は微笑みながら、こつちに手招きをしていた。セミロングの髪が、風になびいている。

ああ、と言ひ、チケットを改札機に通す。ウィーンと、独特の機械音が鳴り、チケットが向こう側へ出る。

チケットを受け取り、園内へ入る。園内には、多くの人が入つて

いた。『クリスマス』だからだろう。まあ、俺らも混んでいることを承知できているからな、と思う。

園内には、クリスマス用に装飾された大きい天使と城があった。天使の目の前では、記念写真を撮る人が多くて、先に進みたい俺らにとつてはすごく迷惑だった。

しばらく歩いていると、いきなり前が止まった。おい、あれ見ろよ、と國分コクブンの声が聞こえる。天使の像の近くを指差している。

「ほら、黒いコートを着ている男のところだよ。なんかもめてんじやん」

「ホントだな。こんな日にもめているんだなんて、なにやってるんだろ」と俺が言う。よく見ると、さっき、俺らの後ろに並んでいたカップルが、黒いコートの男ともめていた。後ろに誰かいるみたいだが、よく見えない。

「そんなことより、早く行こうぜ」齊京サイキョウは、俺と國分の手をとり前へ行く。女子軍団が前にいるのがわかる。不機嫌なのが、ここからでもわかった。

振り返って、さっきの場所へと目を戻すと、あのカップル達はいなかった。

遅い！ と前田の声が聞こえる。「あの雰囲気じゃ、ポップコーンぐらいはおごらされるだろうな」と言っている國分の声が聞こえる。元はといえば、お前のせいじゃないか。

「俺、めちやくちや腹減ったんだけど。なんか食おうぜ？」

「一人でポップコーンでも買ってこいよ。観覧車のチケット売り場にいるからさ」待っててやるから、と齊京が言う。

「そんな冷たいこと言うなよ」

「だって、ホントの事だぜ。ここにいる五人全員が思ってるね。きつと」『きつと』じゃなくて『絶対』だ、と言いそうになる。

「じゃあさ、チケット売り場に並んでいるとき買ってくるよ。それでいいだろ？」

「まあ、並んでいるときならいいだろ」

「マジで？ そうなったら、『急がば進め』じゃないか。早く行こうぜ！」それを、言うなら『急がば回れ』じゃないか、と齊京はつぶやくのが聞こえる。

でも、意味が違うんじゃないか、と思うが声には出さないでおく。みんなが、一斉に走り出す。

アケムラ
明村

遅い。とにかく遅すぎる。ジェットコースターに行ってから、何分経ってんだ。

僕は、そんなことを考えていた。ホットココアを飲む。

「冷たいっ！」あまりのココアの冷たさに、大声を出してしまう。そのせいで、周りのカップルから変な目で見られてしまう。

「こんなの、ホットココアじゃなくて、アイスココアじゃないか……」怒る気にもなれず、携帯を開く。親からのメールは一切届いていない。五杯目のココアを飲むために、カウンターまで行く。

目の前のテレビを見ると、『男度をチェック！』と太い題字で書かれた映像が出ている。なんなんだよ、男度って、と思う。

「いらっしやいませ」無愛想なウェイターが、低い声で言った。

「あの、おかわり」と言いコップを前に出す。

そして、にらみつけるようにこっちを見て、「かしこまりました」と低い声で言った。

『失礼を承知で聞きますが、元ヤンキーじゃないんですか？』と口から出そうになる。エプロンが全く似合っていない。

ココアの入ったカップを受け取る。「ありがとうございました」と気持ち悪いぐらいの満面の笑みでいう。

自分の座っていた席へ、戻っていく。

ココアを飲んでから、十分くらい経ったときだった。隣のテーブル席から、男の怒鳴り声が聞こえたのだ。

「ふざけんなよ？ お前、別れようってどういうことだよ！」男の大声で、周囲が凍りつく。

「だって、ニユースで……」

「うるせえ！ それとこれとは、関係ねえよ！」女の声をさえぎって、男が言う。男が強く机をたたき、喫茶店に音が響きわたる。

「てめえ、誰に逆らってるかわかってんのか？」

「わ、わかってるけど……」その時だった。女と僕の目があってしまった。反射的に、そらしてしまった。何をやってるんだ、僕は、と自分を叱るが、あの男への対抗心は一向に生まれなかった。

「次、逆らったらどうなるかわかってるよな？」男は、不敵な笑みを浮かべる。明らかに、自分のほうが優位に立っている者の、笑顔だった。女は、うん、と弱々しい声で答えた。

「行くぞ。また後で、この話はする」周りの視線に気がついたのか、小さい声で言った。

男は、女を引っ張って出口へと歩いていく。

また、目があう。涙をためた、彼女の目が僕に、助けを求めている。

昔のことをふと思い出す。深雪^{ミユキ}の顔が次々と頭に浮かんでくる。

もう、昔の自分には、なりたくない。今、助けなきゃ、誰が助けるんだ。自分の声が、胸に響く。

衝動的に立ち上がる。黒いコートを着ている男のもとへと走っていく。

「ちょっと、待ってください」肩をつかんで、乱暴にこっちへと引き寄せる。

「んだよ、お前」男は、サングラスをはずし、鋭い目でこっちをにらんでくる。

「こ、ココアをこぼされたんですよ。僕のコートに」どうしてくれ

るんですか！ とわざと大声で言う。

「しらねえよ。んなこと。あのな、お前みたいなガキとは違って、忙しいの。こっちは」

「別れようとしている彼女を説得するためですか？」 男の顔が、少し青ざめる。「うつせえ！ お前何者だよ！」 胸ぐらをつかまれる。どうしよう、あとには、もう戻れない。

心の中の自分が、言ってくる。知るかよ。深雪のようなことにはしたくない。

「あなたの彼女の、兄です」 何だよ、その嘘は。自分でも驚いてしまった。なんという、低レベルな嘘なんだろう。

「そうなんかい。いいお兄ちゃんだなあ。だが、今は俺のもんなんだよ」

男は、不気味に笑い、彼女の手を無理やり引っ張り、走り去る。

「運命には逆らえない」 そんな言葉が、頭の中で響く。

scene 2

中谷

「ニュースです。昨日、月夜市^{ツキヤシ}で起きた殺人事件の有力な情報が、入ってきました。犯人の名前は、香田^{コフダ} 実^{ミフル}。性別は男。黒いコートを着ていて、身長は約180cm。サングラスをかけています。あと、犯人は拳銃を持っているとの情報です」

遊園地内の喫茶店で、俺らは注文の順番を待っていた。俺らのような、注文を待っている人たちのために作られたのか、目の前にはテレビが一台置いてあった。そのテレビでは、殺人事件のニュースをやっていた。ふうん、と、素っ気無い気持ちで見る。

「嘘！ マジでかよ！」前の学生軍団が大声を出す。クリスマス
の記念に來ているのだらう。男が三人、女が三人だ。「あれ、うちの近所だったんだけど」ポニーテールの髪の子が言った。早くしてくれ、と思う。風香が怒り出す前に、早く買ってきてくれ。

「いらっしやいませ」三分後、やっと俺らの番が来た。正確には、二分五十秒だった。ヤンキーのような風貌の男が、レジに立っている。この遊園地の、可愛いキヤラクターの描かれたエプロンが、面白いほどに不釣り合いだった。

「アメリカンドックとホットティーを、二つずつ」笑いをこらえながら言う。

「レモンとミルクはどうしますか？」

「ミルクを二つ」確か、風香はミルク派だったはずだ。

「では、関係者用出入り口の近くのお席が空いておりますので、そちらでお待ちください」ヤンキーが敬語を使っている、と思うと、笑いがこみ上げてくる。まるで、ピエロが喋るような、矛盾感があった。

案内された席に着き、上着を脱ぐ。店内は、そこまで混んでいなかった。改めて、早く来てよかったと思う。

「おい！ どこに行っただって聞いたんだよ！」関係者用出入り口のほうから、大声が聞こえる。喫茶店の中が、静まり返る。そして、ひそひそ声が喫茶店内にあふれる。

「うるさいね、なんか」チョー迷惑なんだけど、と彼女は言う。さっきの学生軍団が、外に出て行ったのが見える。

「なんか、事件でもあったんじゃないの？ クリスマス・イブだし」記念日には、何かしらの事件は起きるだろう。さっきだって、絡まれたし。

「静かにしてください。そんなに怒鳴らなくてもいいじゃないですか。まず落ち着きましょう」子供のような声が関係者用出入り口から聞こえた。

「この園内にはまだいるんです。それだけでも、大収穫です。あとは、園内全域封鎖、犯人を、閉じ込めます。ランがさらわれているんです。何としても、捕まえなければいけません」たまたま、ドアの近くにいた俺しか聞こえていないと思うが、何を話しているのだろうか。

「ハジメくん。ヒロシくんとかは、どうするんだ？」さっきの、大声の男が『ハジメ』という、子供に話しかけている。

「来てもらいましょう、三人全員に。何せ、トキオくんがリーダーですから。それに、捜査計画のプロのアサミさんにも来てもらわないと。ヒロシくんの情報力も必要ですし」

「ススムに連絡を取って、みんなを呼んでもらえばいいんだね？」

「はい。よろしく願います。あと、チョウスケくんも呼んでください」

「わかりました。規則は……」

「破るものですよ。常識です」どこかで聞いたような台詞だと思っていたら、有名な刑事ドラマで主人公が言っていた台詞だった。

とりあえず、『スプラッシュ・コースター』にでもいきましようか、と声が聞こえる。

「どうしたの？」風香が、ミルクティーを飲みながら聞いてくる。

「いいや、なんでもない」と答える。

「あのさ、このあと、どこ行く？」風香がガイドマップを広げる。スプラッシュコースターは、やめておいてくれ、と先に断っておく。

高田

「なあ。後ろにいた人、あのもめてた人たちっぽくね？」國分が後ろを指差す。

「そうか？」服の色とかは、確かに似ている気がするが、運命的にそう出会うわけもないだろう。

「早く！アトラクション混んじやうよ！」藤野^{フジノ}が俺ら二人を呼ぶ。その声についていくように、みんなが座っている席へと急ぐ。

「あのさあ、さっき並んでたときに後ろにいた人ってさ、あのもめてた人たちっぽくね？」

「またその話かよ」俺らは、その話題のしつこさに呆れてしまう。

「だって、マジで似てるもん。視力1.5の俺をなめるなよ！」

「だからといって、同一人物とは限らない。仮にも、今日はイブだよ、イブ。少しくらい似ている人が来ていたって、不自然じゃない」齊京が言う。

「そうかもしれないけどよ……」國分は、少しうな垂れる。

「おい！どこに行ったって聞いたんだよ！」関係者用のドアから、あまりにも場違いな太い声が飛び込んでくる。いきなり的大声に驚き、喫茶店内は静まり返る。

「何？今の」向野^{ヨウノ}が小さい声で俺らに聞いてくる。

そして、それに吊られるように、小声で話すものが増えてくる。小声が、喫茶店の中で集まり、ざわざわという音になる。

「早く出ない？」と、前田が不安げに言う。

「そ、そうだな。早く出よう」俺はそう言って、席を立つ。

「そのほうが、確かに無難だな」俺の一声で、みんなが飲み物を持って出口へと、小走りで向かう。

「おい、臨時ニュースだつてよ」國分が近くのスピーカーに指を刺しながら言う。確かに、周りのスピーカーから何かが聞こえるとは思っていたが、臨時ニュースだとは思わなかった。耳を澄ます。

「臨時ニュースです。昨日、月夜市で起きた殺人事件の有力な情報が入ってきました。犯人の名前は、香田^{コウダ} 実^{ミナル}。性別は男。黒いコートを着ていて、身長は約180cm。サングラスをかけています。被害者は、恋人の風野^{カザノ} 恭子^{キョウコ}さんです。十五歳の女の子が、犯人によつて誘拐されています。恋人が、犯人から逃げている最中に拳銃で打たれている模様から、拳銃を所持しています。十分に気をつけてください」

「ふん。帰るときは気をつけるってことか」

「さっきもあるし、なんか怖いね……」藤野が國分の顔をふと見る。

「ま、こんな大勢の人がいるんだし、会う確率も少ないでしょ」

「お、ついたんじゃないね？ 観覧車」齊京が観覧車を指差す。観覧車の大きさとしては、日本の中でも結構大きいほうらしい。下から見ても、大きいとわかる。周りのレトロな雰囲気のある街の中に、観覧車があるのは、ここが異世界のように感じられた。

観覧車を見て、「でけー」と、思わず声が出る。

「でも、すごい人が並んでるよ」前田が、苦笑まじりに言う。

行列を見て、「なげー」と、思わず声が出る。

「どうしようか……」向野が、ココアを飲みながら言う。

「並ぶぞ」國分が、列の後ろとは逆方向のアトラクションの方に歩き出した。

「おい、そっち逆だぞ」齊京が呼び止める。

「ショートカットするんだよ」國分が、微笑みながら言う。

「まさか、クーポンか？」

彼はにこつと笑って、「そう、優先クーポンだ」と、國分は六枚分のチケットを頭の上に、大きく掲げる。

早く来いよ、と國分が俺らのことを急かす。

わかってるよ、と言い俺らはまた、走り出す。

明村

「深雪！」

「いいよ、早く逃げて！ 水がこっちに来るから！」

「大丈夫だよ、しっかり僕の手を握っててね」後ろのほうで、コンクリートが壊れたような音がした。水の流れの勢いが増してくる。

ゴウゴウと、音を立てながらこっちに向かってきている。深雪に大量の水がぶつかっている。衝撃がこっちにも伝わる。

水が、川岸にいる俺にもぶつかった。眼をつぶり、体を川のほうから背ける。

眼を開けて、感覚を手のほうに集中させる。手のぬくもりが全くないことに気づいた。

深雪のことを呼ぶが、何も反応がない。手を、川の中から出してみると、そこに深雪はいなかった。

意識を戻す。なぜ昔のことを思い出したのかはわからないが、今はそれどころじゃない状況だった。彼女のことを追わなければ。

立ち上がり、彼女たちが行った方向へと、足を踏み出す。すると前から赤色のロングスカートをはいた女の子がやってくる。それは、よく見ると小百合と呼ばれていた女だった。

「さ、さっきの……」彼女に話しかける。

「ああ、さっきはアリガトね。小百合って、呼ばれていたけど、本当の名前は、アイダ藍田 ラン蘭。よろしく」深雪とは、全く違うボーイッシュ

ユな性格だな、と思う。

「僕は、明村 源。（アケムラ ゲン）と言います。よろしく願います。」あの男が、隣にいないことに気づく。まさか、逃げてきたのか？ と疑問に思い、聞いてみる。

「いや、トイレに行ったから。その隙に逃げてきたんだよ」なんなんだ。この女は。

「それで、これからどうするんですか？」

「いや、みんないないし……」すると、向こうからさっきの男がやってきた。すごいスピードでこっちへ向かってくる。

逃げよう、と僕は彼女に言い、手を引っ張る。近くに薄暗い路地があつたので、そこへ身を隠す。何度も来たことがあるので、園内の道はほぼすべて把握できていた。

「ここに隠れていれば、一時間は大丈夫です。今は使われていない、関係者用の通路ですから」

「そうなの？」

「はい。それより、なぜ彼氏のところから逃げてきたんですか？」

「彼氏なんかじゃないよ。あんなの」即答される。じゃ、あれは誰なんだよ。

十分は経った、気がした。「そろそろ出ましようか？」と蘭さんに聞いてみる。

「うん。もう、行つたんじゃないかな？」と答える。彼女の手を再び握り、立ち上がる。外に出て、左右を見渡す。近くには、黒いコートを着た男はいなかった。

「行きましようか」

「あのさ、さっきから思ってたんだけど、何であたし達、手をつないでるの？」恋人じゃあるまいし、と言われる。確かにそうだった。初対面の人と、手をつないでることに、今はつきりと気がついた。

「い、いや。あの人に気づかれないようにするには、これが一番見つきりにくいんじゃないかな、と思ひまして」僕は、思っている以

上に、嘘をつくのが下手らしい。愛想笑いを浮かべる。

「なるほど。会ったばかりにしては、いい判断じゃない」

「そ、そうですね」下手な嘘が通ってしまったので、驚きを隠せない。

「うん。なかなかいい案。出会ってすぐに、そんな案は浮かばないよ。タニミヤ君に似ているよ。そんなとこ」彼女は、僕に微笑む。心臓が、バクバクと音を鳴らし、顔が火照る。

「早く行きましょう」と言い彼女の手を、強く握る。

scene 3

中谷

ジェットコースターは無しになったが、ヒドイ事にその次に行きたくなかった所に行くことになってしまった。『お化け屋敷』だ。実は、俺は霊やお化けが苦手だった。と、いうより、暗いのが苦手なのだ。俺の三つのコンプレックスの中の一つがこれだ。

だが、彼女の前でそんな弱音を吐いていられない。クリスマスイブにフラれるなんて、ダサすぎる。

「早く乗ろうよ、爽」彼女が急かしてくる。ああ。と、答える。語尾が震えていないか、少し不安になる。

お昼前なのか、アトラクションにはすぐに乗れそうだった。何か事件よ、起きてくれ。と、叶うはずもないのに、天に願ってみる。人工物の林の道を通り、アトラクションの乗り場へ行く。どうやら、『乗り物』らしい。少し、ホッとする。

「行こうか」声が裏返ってしまう。まだ、怯えているのか？ 俺。

アトラクションに乗り込む。目の前には、イスが二つあった。これに乗るのだろうか。左隣の説明員が前のイスに乗るように指示した。

説明の通りに、イスに座る。背もたれに寄りかかると、耳のそばのスピーカーから、不気味な音楽とともに声が聞こえる。「ようこそ！ 『ホラーマンション』へ。ここでは、霊にとりつかれたマンションを救うために、霊を退治してもらいます」

どんな物語だよ、と心の中で突っ込む。ゆっくりと、アトラクションが動き出す。

「では、出発！」係員が、アトラクションの雰囲気とは不釣り合いな声で言う。

「風香って、こういうのに強いの？」恐る恐る、聞いてみる。

「うん、好きだよ。お化け」爽は、どうなの？と、彼女は髪をかきあげながら、聞いてくる。

「あ、いや……。俺も、だよ」声が裏返った気がした。無理矢理、笑顔を作る。

いきなり、進んでいたアトラクションが止まる。まだ始まったばかりじゃないか、と思う。

ふと気がつけば、周りには俺らしきいなかった。ギシギシと、木箱がきしむ音が聞こえる。

「ねえ、何？この音」風香が、俺の右手を握る。心臓の鼓動が速くなる。

いきなり、ドン。と衝撃音が鳴り響く。何が起きたか、わからない。

「え？ミイラ男？」結局、俺は最初の三十秒で、失神してしまった。起きたときは、ちょうどアトラクションが終わっていたので、風香に、最初に出てきた人は何だったのか、と聞いてみると、「ミイラ男」と彼女は答えた。

「マジで？」あの包帯野郎に気絶させられたのは、いささか不愉快だった。

「でもさ、結構怖かったよね。意外と」
「あ、ああ」

「じゃ、次どこ行く？」風香は、かばんからガイドマップを取り出した。「次こそ、ジェットコースターに行こうよ」

え、と思わず声を上げてしまう。まだ、あの刑事達がいるんじゃないか？

「どうしたの？爽」

「いや、なんでもないよ。風香が行きたいんだったら、そこでもいいよ」

「じゃ、ここで決まりね」じゃ、早く行こうよ、と彼女は言い、走

り出す。

高田

「まさか、國分があんなものを持つてとは思わなかったよ」俺は、思ったことを素直に言った。

「それも、優先乗車券だとは思わなかった」

「ま、他にも何枚あるけどね」國分は、自慢げに言った。

「で、どうする？」齊京が、声のトーンを低くして聞いてくる。

「どうしたんだよ。齊京」

「いや、この観覧車、二人乗りなんだよ」思わず、え、と声が出る。

「何で先にそういうことを言わないんだよ！ この中の、誰か一人が女子と一緒に乗らなきゃいけないんだぞ！」そんなの嫌だね、と俺は言う。正確に言えば、彼女以外は、だ。

「じゃさ、こんなのはどうだ？」國分は、あるルールを持ち出してきた。

「まず、俺らでじゃんけんをする。それで、負けたやつが女子と一緒に乗るんだ。で、それじゃあその負けたやつがかわいそうだ。だから、他のアトラクションでも、それを行う。ってのはどうだ？」おお、と思わず言ってしまう。國分にしては、まともなルールだったからだ。

「いいね。俺、賛成」齊京が、賛成した。お前はどうするんだ？

という眼で、二人が俺を見る。

「お、俺も賛成」

「よし、これで決定だな。あとは、女子にこのルールが通るかどうかだ」さあ、ここからが勝負だ、と國分が小声で言う。

「あの、女子の皆さん。重大な事実が発覚しました」

「國分君が、クーポンを持つてることなら知ってるよ」向野が、自信満々に言うが的外れである。

「実は、観覧車の一つに乗れる乗車人数が……二人なんですよ」
「それで？」と前田が聞いてくる。

「つ、つまり。俺ら二人、前田たちも二人。一人ずつ男と女が余って……」

「あ！ ってことは、誰かが、男女一組で乗らないといけないんだ！ って、え？」

「ウソ！ マジで？」女子たちが驚いている。『歓喜』より『拒否』の気持ちのほうに勝っているように、聞こえた。

「ああ。本当じゃなかったら、こんな話する必要ないじゃないか」もつともだよ、國分。

結局、國分の『ジャンケンルール』を採用した。それが一番合理的にも思えたし、俺にとっても、一番都合のいいルールだと思えたからだ。

「まさか、言いだしつぺの國分が女子と乗るとは思わなかったよな」齊京が笑いながら言う。

「確かに。あれは、想定外だったな」國分自身も、予測していなかっただろう。

この観覧車には、『俺・齊京』『前田・藤野』『國分・向野』のペアで乗っている。きつと、國分も頑張っているのだろう。

「で、どうするの？ 前田とは」

「ああ。帰りにでも、とは思ってるけど……」

「なにか作戦とか、無いの？」

「いや、特に……」

「おい、マジでかよ。それはきついぜ、結構」

「じゃ、どうすればいいんだ？ 齊京」

「その前に、俺と國分が協力するから、こっちの事情も聞いてくれない？」頼む、と齊京が言った。

観覧車は、まだ四分の一しか進んでいない。

明村

「ホントに乗るの？」藍田さんは、大きな目で俺のことを覗き込んでくる。

「は、ハイ、大丈夫ですよ。僕も苦手ですから。絶叫系は」

俺らは、怪しい男から逃げてジェットコースター乗り場へときていた。あいつから逃げるには、アトラクションに乗るべきだ、という藍田さんの意見を取り入れて、一番近いこの『ダイビングコースター』に来ているのだが、俺らは、絶叫系アトラクションが苦手だということを忘れていた。第三者から見たら、焦りすぎだ、と言われてもしょうがない状況だ。

「まあ、園内にあるジェットコースターの中でもゆっくりなスピードですから。大丈夫ですよ」

「あのさ、さつきから思ってたんだけど、あたしがタメ語なのに、あんたが敬語っておかしくない？」人前では、敬語をなるべく使うようにしている俺にとっては、考えられないこと一言だった。

「そうですかね」あえて、敬語で返す。

「そうだよ。絶対おかしい。だからさ、ここで一回決めちゃおうよ。ルール」彼女が人差し指を立てて、言う。

「まず、タメ語に直して。カップルっぽくしてんのに、あんたが敬語だったらおかしいでしょ？他にも、『藍田さん』じゃなくて、蘭でいいから。あたしも、明村君か、源って呼ぶから。あと、あいつが来たら、私にすぐ知らせること。わかった？」

「あ、ああ」タメ語に直す。

「じゃ、行こうよ。今、ぜんぜん並んでないし」彼女は、俺の手を握ってジェットコースター乗り場へと小走りで行く。

こんな時間が、長く続けばいいな、なんて思ったりする。

時計を見る。今、十二時三十分だ。「飯はどうする？」と彼女に聞く。

「あたしは、どっちでもいいよ。明村君は？」

「俺は、まだいいかな」ココアも結構飲んだし。

「じゃ、お昼はもうちょっとあとでいいね」彼女は、俺の顔を覗き込んでくる。少し、心臓が跳ねる。

「早く乗ろうぜ。蘭」彼女の手を握って、小走りにアトラクション乗り場へと進む。

「あとさ、乗り終わった後にあそこに行つて、お土産買おうよ！」彼女は、ここから百メートルほど離れた洋風の建物を指差した。きつとあそこが、お土産屋なのだろう。近くに、ジェットコースター乗り場も見える。「いいよ、俺も買いたい物あるし」特になかったが、一応同意しておく。

数分ほど歩いた場所に、乗り場があつた。そこから、地下へと階段で下つていき、係員にチケットを渡し、円形の乗り物に乗り込んだ。

今、俺は一連のことを思い出していた。大丈夫、大丈夫。心の中で、呪文のように唱えた。

「ダイビングコースター、発車いたします！」係員の一言で、ジェットコースターが動き出す。

体が、風の勢いでコースターに押し付けられる。

コースターは、決められた線路を走っている。

右へと大きく曲がり、俺らの体も、つられて右へと体が傾く。

緩やかな坂を、一気に下つていき、目の前の坂を上つていく。

コースターは一気に昇る。と、思いきや、頂点のところでいったん止まった。

故障か？　と思うが、いきなりコースターは動きだした。コースターは、ゆっくりと、ゆっくりと、下へ行こうとする。

俺は、しまった！　と思った。下が見えてしまったのだ。思わず、目をつぶる。その時だった。

コースターは、フルパワーで、その坂を下っていく。悲鳴のよう

な音が口を出す。

コースターは、徐々に減速していった、最初のスタート地点へと戻って行った。

「結構、怖かったね」彼女は、コースターを降りながら言った。

「ああ。特に最後が」思い出しただけで、身震いしてしまう。

あ！ と彼女は、いきなり大声を出し、ポケットの中を探り始めた。

「どうしたんだよ、いきなり」と俺が言うと、彼女は「良かった」と言ってポケットの中から、ハンカチを取り出した。

「いや、ハンカチが無くなったのかと思って」

「そんなに大事なもののか？」と聞くと、「そりゃあ、大事なもののよ。私にとって」と言った。

そして、彼女は「トイレに行ってくるね」と言って、ハンカチを大事そうにポケットに入れて、走っていった。

「待たせちゃってゴメンね」彼女は、手を振りながら戻ってきた。

「いや、そこまで待つてなかったよ」

「じゃ、お土産屋さんに行こうか」

「そうだね、そろそろ混み始めだと思うし」

「小百合見つけ」背中に寒気が走った。逃げなきゃ。悪魔から、逃げなきゃ。

「逃げるぞ」彼女の手を強く握る。足を一步前に踏み出した、その時だった。

俺の頭の後ろに、何か感覚があった。冷たい、ひんやりとした物が頭に押し付けられている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7969e/>

ナットクラッカー

2011年1月9日14時08分発行